講演要旨

午王山遺跡の弥生土器を読みとく

柿沼幹夫（一般財団法人 さいたま市遺跡調査会）

1　午王山遺跡出土土器群の段階区分

午王山遺跡出土土器群から見た集落形成の段階区分は、次のとおりである。

第１段階　弥生時代中期末　宮ノ台式Ⅴ期

第２段階　弥生時代後期前葉　岩鼻式土器の南下（岩鼻式２～３期と久ヶ原Ⅰ式の混成）

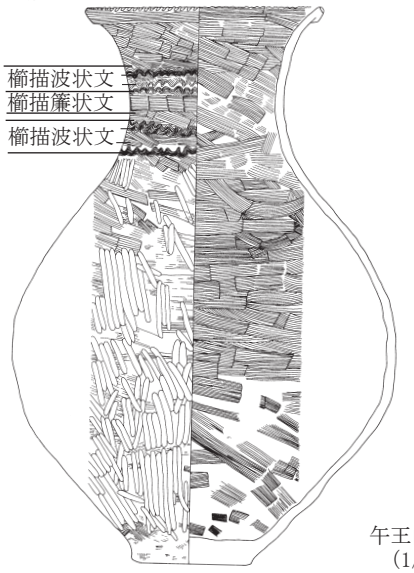
第３段階　弥生時代後期中葉　下戸塚式土器の拡散と環濠集落の造営（下戸塚式中期と久ヶ原Ⅱ式の混成）

下戸塚式土器を継承する弥生町式土器段階（後期後葉）では、集落は廃絶している。

2　岩鼻式土器の南下

弥生時代後期初頭（１世紀）、北武蔵では岩鼻式土器が生成し、白子川流域に局地的に進出している。

岩鼻式土器は中部高地型櫛描文土器文化圏の一角を占め、比企・入間地方を中心に分布する。文様は頸部を中心に施され、篠竹を束ねた簾状工具を用い、時計回りで簾状文や波状文を施文する。

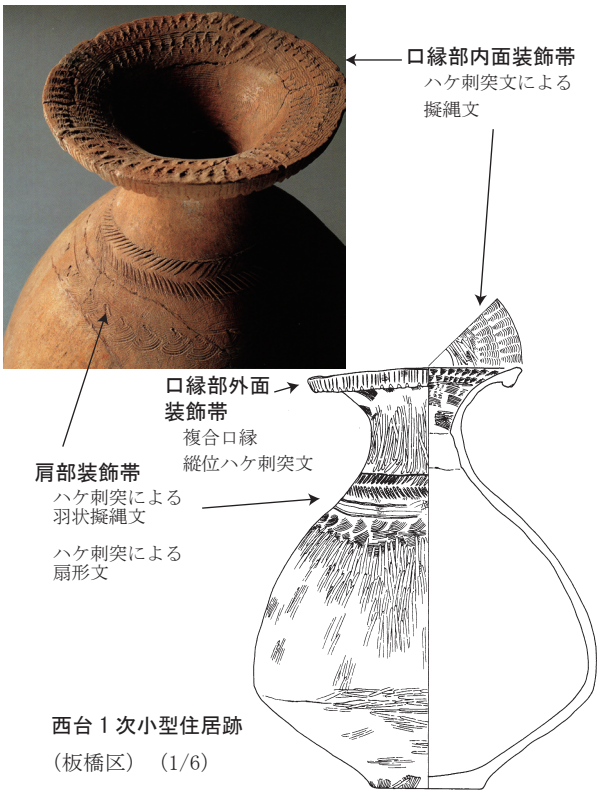


第１図　岩鼻式土器　壺

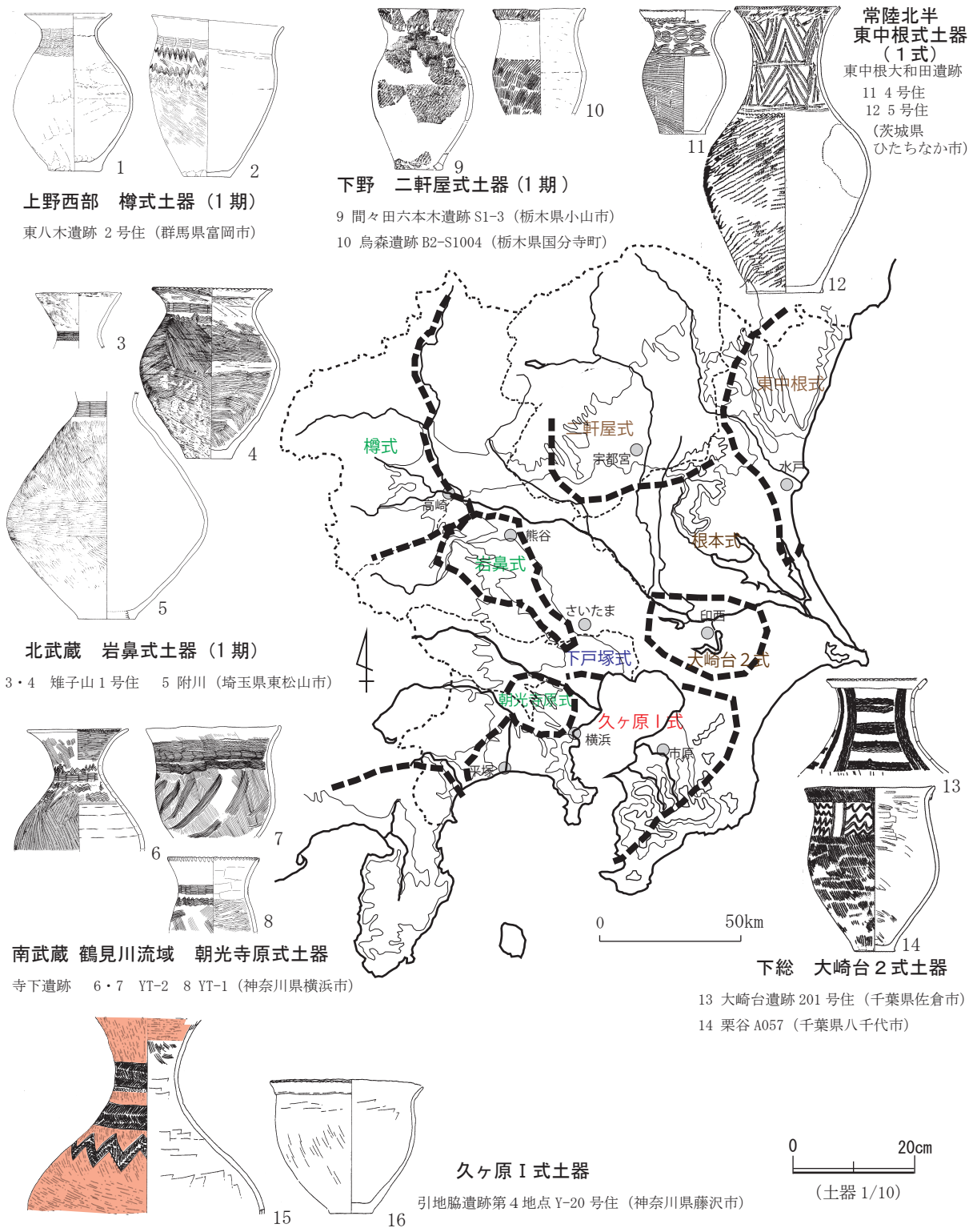
3　環濠集落と下戸塚式土器の時代

弥生時代後期中葉に入る頃（２世紀）、岩鼻式土器を使用する人々は跡形もなく白子川流域から去ってしまう。替わって午王山に居を構えるようになるのは下戸塚式土器を使用する人々である。

下戸塚式土器の祖型は、東海地方東部（東遠江）の菊川式土器で、武蔵野台地中央部を刻む神田川流域に遠来した人々がもたらした。新宿区の下戸塚遺跡は彼らの拠点で環濠集落を築いて定着し、やがて武蔵野台地東北縁へ拡散していった。下戸塚式土器は、古・中・新期に３区分でき、午王山遺跡の集落造営期間は中期から新期にかけてであった。中期には菊川式系譜のハケ刺突文やハケ目沈線が盛行するが、新期には端末結節縄文が文様の主体となり、弥生時代後期後葉の弥生町式土器（２世紀後半）へ継承されていった。

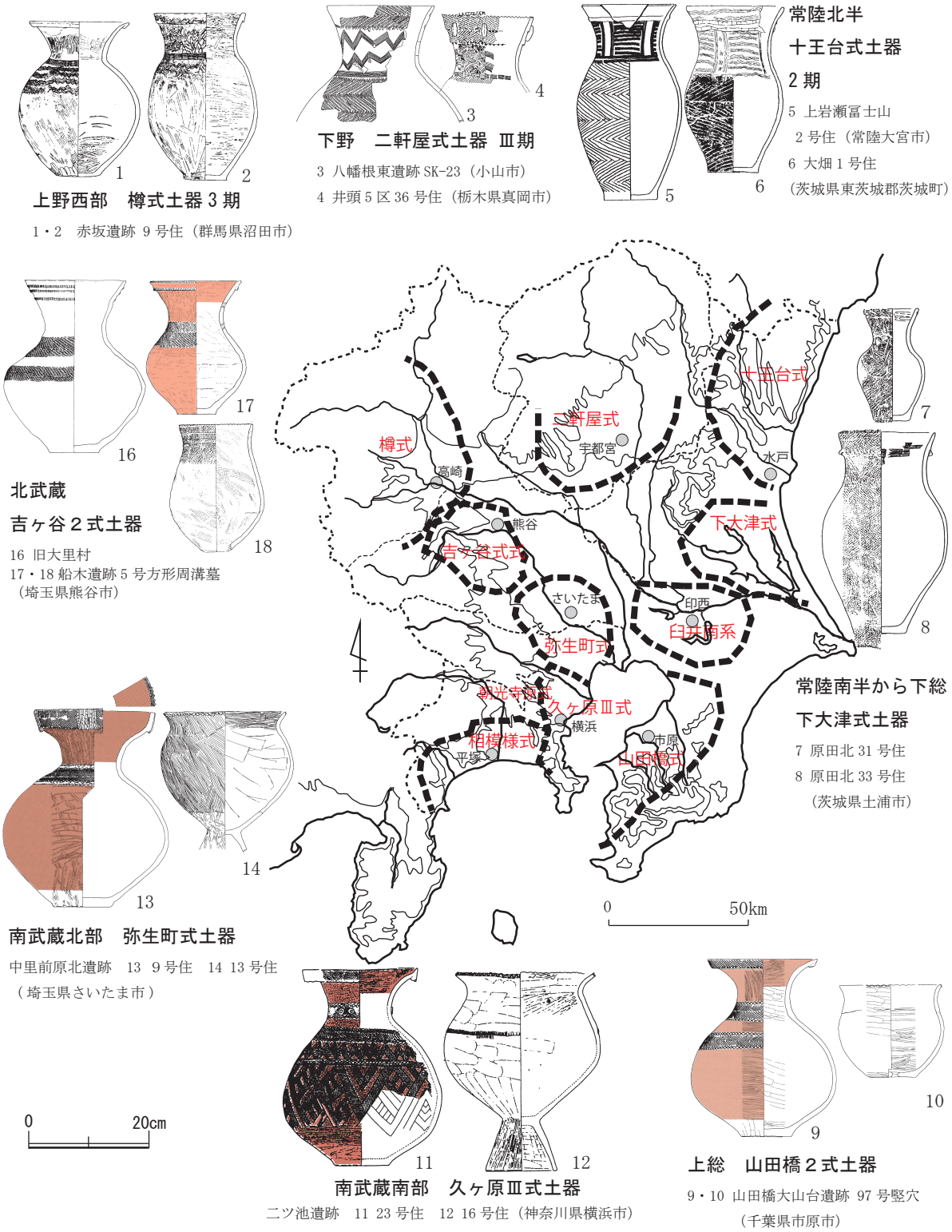


第２図　下戸塚式土器　壺の施文構成



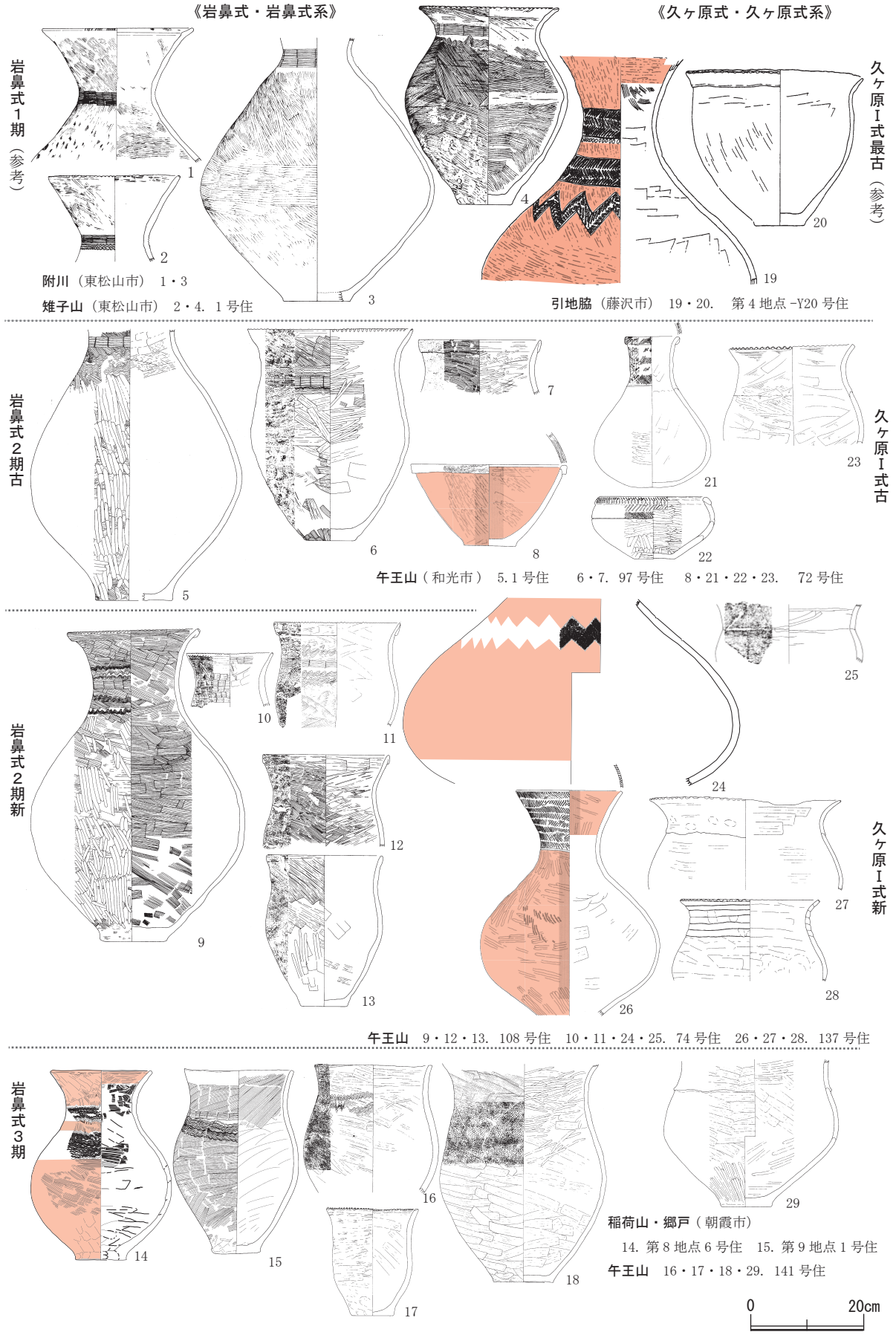
第 3 図　関東地方における土器にみる地域性　弥生時代後期初頭

弥生時代中期末から後期初頭（1 世紀）にかけては、列島規模で干ばつと洪水が繰り返された。関東は人口希薄な地域になっていたが、関東西部山地沿いの人々は中部高地型櫛描文化圏の周縁地域を形成し、西毛で樽式、北武蔵で岩鼻式、多摩丘陵に朝光寺原式土器が生成された。岩鼻式集団の一部は白子川流域に南下して、午王山にも居を構えた。東京湾沿岸地域から相模にかけては久ヶ原 I 式土器が生成されたが、その間隙を縫って武蔵野台地神田川流域には東遠江系の人々が遠来して下戸塚式を生成し、定着拡散させた。

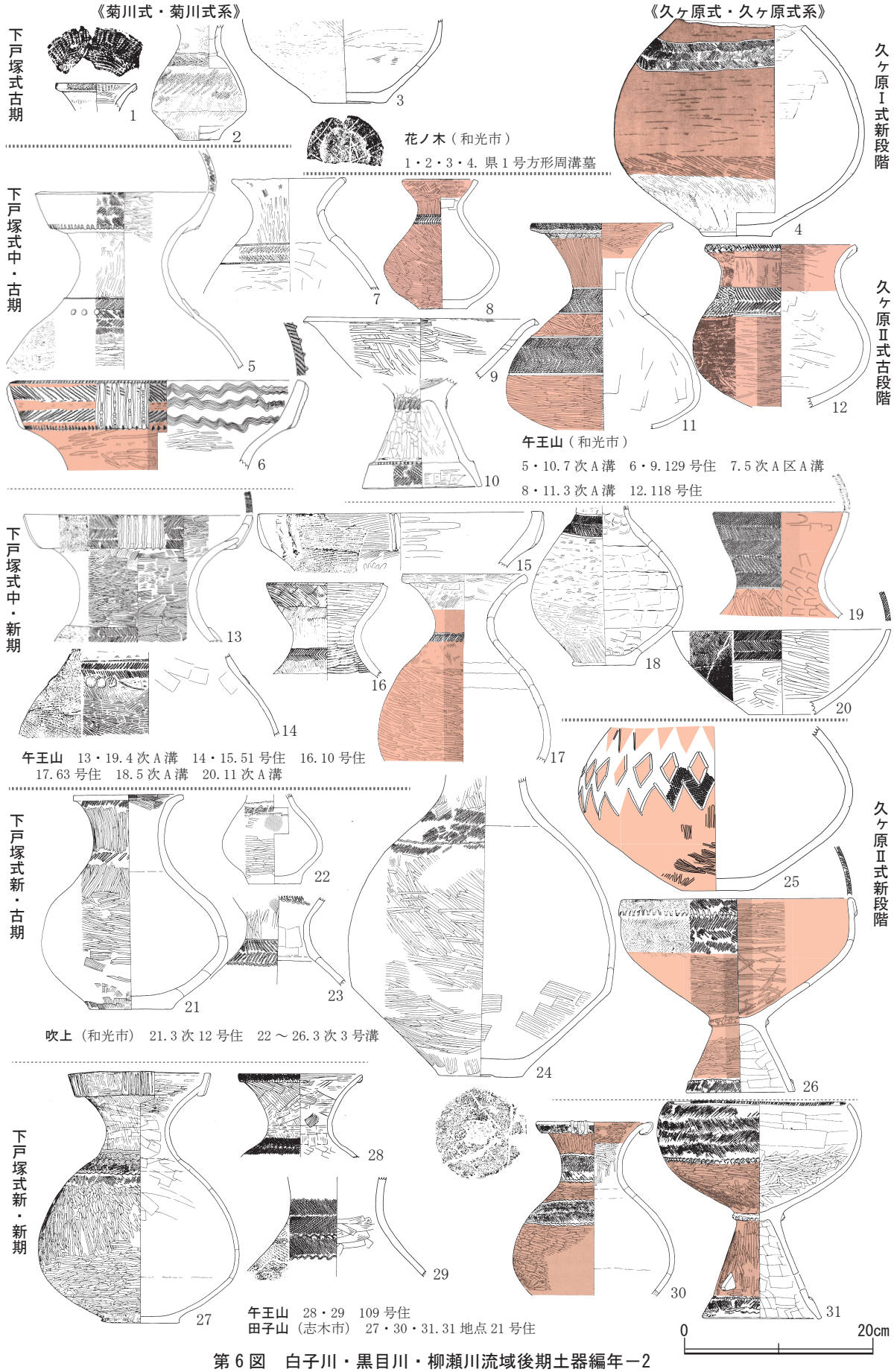


第４図　関東地方における土器にみる地域性　弥生時代後期後葉

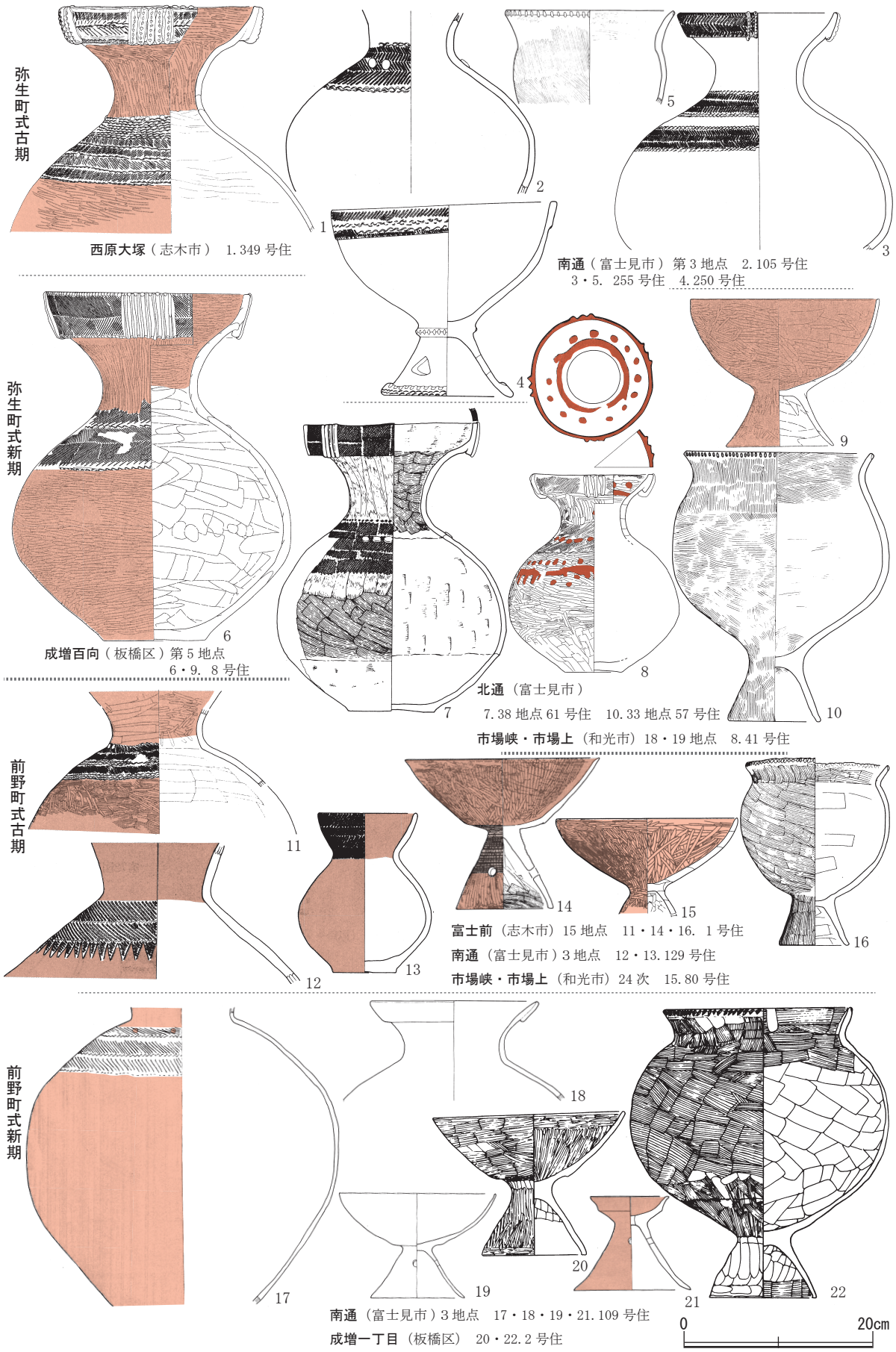
下戸塚式土器が定着・拡散し弥生町式土器が生成された後期後葉（２世紀後半）の関東は、土器の地域色が顕著になった時代である。北武蔵では岩鼻式から変容した縄文施文で輪積み装飾の吉ヶ谷式、南武蔵南部では胴部に繁縟に施文する久ヶ原Ⅲ式、上総が久ヶ原式の姉妹型式である山田橋２式土器である。西毛は樽式３期で、「高崎型」「富岡型」「沼田型」などの地域色の内在が指摘されている。東関東の常陸では、北半部を十王台式が、南半部から下総にかけては下大崎式（上稲吉式）が分立した。



第5図 白子川・黒目川・柳瀬川流域後期土器編年－1



第6図　白子川・黒目川・柳瀬川流域後期土器編年－2



第 7 図 白子川・黒目川・柳瀬川流域後期土器編年－3